

<事例 3>

F さん 50 歳（男性）。 85 歳の母親と二人暮らし。

父親はすでに他界し、妹は嫁いでいるため年に数回帰省する程度。

F さんは、子どものころからほかの子供と遊ぶことが苦手で、いつも一人で漫画を読んだりゲームをすることが好きな子でした。勉強はクラスで中程度。地元の大学まで進学し卒業しています。卒業後地元のスーパーに就職。パートさんの勤務調整や商品の発注など業務は多岐にわたっていました。以前から、周囲に協力を求めたり、相談することが苦手だった F さんは 1 年程で体調を崩し退職。その後いくつかのアルバイトをしてはやめるを繰り返し、30 代後半からは仕事につかないまま自宅で過ごしていました。何をするでもなく一日中パソコンに向かって動画を見たりゲームをしたりしている毎日。家事は母親が行っていましたが、父親が亡くなってからは、買い物や部屋の片づけなど時々手伝うことはありました。

母親は F さんに対して、働くことや出かけることを無理強いすることはしたくないと考えてきましたが、自分も高齢になり、F さんの将来に不安を感じるようになりました。「優しい子」「息子のために貯金はしてきたけれど、一人で生活していけるか心配」「妹も生活があるから迷惑はかけたくない」と周囲に漏らすようになりました。母親が知り合いから就労支援センターの案内をもらったことをきっかけに、F さんの将来について相談してみることになりました。

母親からの相談をきっかけに、就労支援センターの相談員が F さんと面談。F さんに面談を拒否する様子はありませんでしたが、自分の将来に対する不安や現状について感じていることもない様子でした。相談員は面談を通じて、医療につなぐ必要性は感じませんでした。外に出るきっかけや生活リズムを整えるための目的があれば、将来就労につながる可能性があるとして支援目標を立てました。相談員は F さんと定期的に面談することから支援を開始。3 か月後 F さんは就労支援センターまで定期的に面談に通えるようになりました。面談を通じて F さんは長期間にわたり家族以外と交流することがなく、日常生活以外の行動が苦手なことがわかりました。人と交流することや、家の片づけを手伝っていた経験を活動に取り入れながら就労支援センターでの就労に向けた訓練プログラムを行うことにしました。具体的には定期的にセンター内の清掃や花の世話などを行うことにしました。

6 か月後、F さんはセンターの職員や利用者と挨拶や言葉を交わすことができるようになりました。相談員は、F さんが定期的な活動で生活リズムが整ってきていることから、就労につなげるための実習先を選定することにしました。これまでセンターで行ってきた清掃を業務内容とし、F さんとのコミュニケーションに配慮してもらえるよう地域の老人ホームを実習先として設定。清掃業務にあたらせてもらえるよう依頼し受け入れていただけることになりました。

3 か月の実習期間で、あらかじめ決められた清掃場所や方法であれば 1 人でも業務を行うことができるようになりました。実習期間終了後、相談員の支援を定期的に受けながら 1 日 3 時間週 3 回程度のアルバイトスタッフとして業務を行っています。